
ひとやすみ

津軽 あまに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとやすみ

【Nコード】

N23780

【作者名】

津軽 あまに

【あらすじ】

放課後の図書館。図書館の主である「先輩」と「俺」との哲学論。甘かったり温か^{ぬる}ったりにご注意を。企画「哲学的な彼女」投稿作品。

(前書き)

特別企画「哲学的な彼女」投稿作品(一部改稿)

本は嫌いだが、図書室は好きだった。

校舎の中で、この場所だけは煩わしい喧騒と無縁でいられる。

ほんの、放課後の一休み。

適当な本を棚から取り出して、机に腰かける。

ページを開く。なにやら知らないカタカナの名前。

大昔の哲学者らしい。そういえば、倫理の授業で名前くらいは覚えた気がする。

話がオカルトめいていて、哲学ってというのはそんなものと幻滅した。

裏を返せば、色々なわだかまりの突破口として、哲学なんてらしいすぎるシロモノに期待していた青さが、俺にもあったということだ。

「君が哲学書だなんて、珍しいね」

誰もいないはずだった部屋に、女の声が響く。

振り返るまでもない。この部屋の主、本の虫を自認する変人だ。

「適当ですよ。図書室で本を持たずに座るのも落ち着かない」

「なるほど、違くないね。それでも、少し嬉しいよ。その本は私の後、誰も借りていないんだ」

そもそもこの部屋自体、放課後にすら閑古鳥がなく惨状である。

ましてこんな本が貸し出される機会は、宝くじなみの可能性と違っていいだろう。

というか、この女は、こんな本をわざわざ好き好んで借りて読んだというのか。

ばらばらと手の中の紙をめくる。

魂がどうの、現実世界と異なる真実の世界がどうのと、やはり胡散臭い。

「そりゃそうでしょうね。何が面白いんだかちっともわかりません」「まあ、私もよくわかってるわけじゃないけど。でも、哲学するのは、面白いと思うよ」

「そんな結論に辿り付ける先輩の思考の方がよっぽど面白いと思いますが」

「ありがとう、私はあまり人から面白いとか愉快と形容されることがないんだ」

そう言って、彼女は笑った。

学年が違う自分でも知っている。

俺とは違うベクトルで彼女は、他の生徒から浮いている生徒だ。敢えて面倒な人付き合いを避けている、中二病が重篤化しただけの俺とは違う。

自然に生きて、その方向性が人と違って、自然と人が距離を置く。そんな存在。

「君はケネパルルスが好きかい？」

「何ですかそれは」

「モハリのダロに生息しているチエルシエの一種だよ。好きかい？」

先輩の口にした固有名詞は、どれ一つとして俺の記憶野に存在しないものだった。

生息するということは、生き物なのだろうが、会話の流れからその具体的な姿が全く想像できない。

「残念ながら、俺はケネパルルスっていうのを知らないですから、好きとも嫌いとも言えないですね」

「そう。人は知らないモノに対して評価を下せない。ああ、あと、ケネパルルスなんてモノは存在しないから、君は自分の不明を恥じることがないよ。モハリもダロもチエルシェっていうのも、口からでませだ」

「ひどい質問ですね」

「そうだね。ただ、実在したものを例に挙げて、万が一にも君がそれを知っていたら、この喩は意味を成さないからね。まあ、確かに底意地の悪い問いだった。それは謝るよ」

わけのわからない質問。

けれど、同級生が興じる流行の歌やテレビゲーム、出会ったこともないスポーツ選手の話題より、幾らかはこの会話の方が、俺の意識を刺激した。

「さて、そこで改めて質問だ。君は哲学をよく知っている？」

「ほとんど知りませんね」

「では、君にとって哲学とは、ケネパルルスと同じモノなわけだ。知らないモノに対して評価は下せない。ならば、面白くないという評価をするのも、まだ早いのではないかな？」

先輩の微笑みが深くなる。

なるほど、これは参った。

「ここまで言われれば、自分も先輩がどんな話を続けようとしているか、想像がつく。」

この人は、こう言っているのだ。

この野郎、知らない癖に、私の好きなものを勝手に評価するなど随分と大人びて理屈っぽい語り方をするが、この人の根にあるのはどこまでも子供っぽい負けん気らしい。

どうやら知らないうちに、自分は彼女の地雷を踏み抜いていたということか。

「降参です。じゃあ、先輩、哲学って何ですか？」

「うん、やはり君は頭の回転が速いな。話が早くて助かるよ」

先輩は、こんなに笑う人だったろうか。

細い指が唇を撫でる。

何気ない素振りが妙に余裕を感じさせ、相手が教師などよりよほど大人びて見えた。

そんな動揺を押し殺して、できるだけ平坦に言葉を返す。

「そりゃどうも」

「とはいえ、私も哲学の何たるかを知っているわけではないんだけどね。哲学の入門書をいくつか読んで、それらしき理屈でそれらしき思索をしてそれらしき自己満足を味わっているに過ぎない。まったく、野狐禅もいいところだ。よって回答も我流になるけれど、それで構わないね？」

「もちろん。少なくとも俺よりは先輩の方が詳しいでしょうから」

先輩は頷くと、懐からメモ帳を取り出した。

適当なページを開くと、フリーハンドで大きな四角を描く。

「世の中の大抵の事象には、因があって果がある。刺激があって反応があるように。風が吹けば桶屋が儲かるようにね」

箱の左に「因」「風」、右に、「果」「桶屋の儲け」と、単体では間抜けた文字が丁寧な字体で記される。

すらすらと動くその指の動きが滑らかで、そんな些細なことにまでこの人の性格が表れているような気がした。

「まあ、事象の中には、因が見えずに果だけが意識できるようなもの

ノもあるわけだけれど。たとえば「心」とか、「自意識」とか、「正義」とかいうように」

箱の右側に書き加えられる「心」「自意識」「正義」の文字。

そして、彼女は、左の文字群から四角へ、四角から右の文字群へと矢印を引いた。

「人間の脳は素晴らしい特性を持っている。それは「演算機能の最適化」だ。生存する上で必要のない事象を思考の外へと切り離し、それによって生まれた脳の処理機能の余裕を、より重要な問題に振り分けることができるという、偉大な機能だ。人の発展はそれによって支えられてきたと言ってもいいだろう。生存に直結せず、容易に変容しない問題について、人の脳は自動的に考えることを止めてしまっただ。固定化された「常識」、思考しても詮無きことであるとしてね。世の中の多くの事象に存在する、因と果の間のブラックボックス、そして、概念の根幹というブラックボックスについて、人は思考せず、「そういうものだ」と理解せぬまま受け入れている。そうすることで「より優先度の高い」問題に取り組み、進歩している」

先輩のシャープペンシルが、メモ帳の中心の四角を塗りつぶす。

確かに、その話はなんとなく理解できる。

朝起きてから、夜眠るまでの間、身の回りで発生する全てのことについて、人は知覚しても認識はしない。

感知はしても意識しない。受容はしても理解しない。

その人としての特性を、杜撰だと断じるか、生産的であると肯くかは、難しい。

ただ、これが人間的な性質だとするならば、自分のクラスメートたちは自分よりよほど人間らしいのだろう。

自分が意識し、思考するものの多くを、彼らは当然のように受け

入れ、思考すらせずに 生活している。

「そこで、哲学だ」

こちらの表情の変化に気付いたのか、先輩の口元から、笑みが消えていた。

笹の葉を横にしたような目が、真っ直ぐにこちらを見ている。

「哲学というのは、その「演算機能の最適化」を、意識的、限定的にオフにする行為だ。当然のことを、本当に当然であるのかどうかと思考する。当たり前と思われる因と果の間にあるものを探求する。常識というブラックボックスを、可能な限り、丸裸にしようとする。そういう学問だと、私は思っている」

四角がぐるぐると丸で囲まれる。

なるほど。何となく理屈はわからないでもない。

けれど、言ってみれば、それは「無駄な行為」に他ならないのではないか。

ボタンを押せば電子レンジは勝手に料理を温めてくれるのに、その構造や機能の十から十まで理解する必要はない。

当然のことは当然のように、そういうシステムであると、受け入れてしまえば、とても楽に生きられるはずなのだ。

少なくとも、自分はそのことを知っている。

「それは、楽じゃない考え方だ」

小さい頃から自分は「どうして」の多い子供だった。

いや、幼い頃のそれは、とても自然なことだ。

多くの何故を経て、それに対する大人の反応を見て、子供は、「知るべきこと」「見過ごすべきこと」を理解する。

だからその「どうして」は、いつか蒙古斑のように成長するにつれて消えていくはずのものだった。けれど自分は、いつまで経っても、その「どうして」から卒業できなかつた。

周りの皆と自分を比較して、周囲に合わせて楽に生きるべきだと思っていた。

けれど、そうできない自分がもどかかった。

皆のように、色々なことに無自覚になって笑う。それができない自分が嫌だった。

だから、彼らと距離を離れた。

いつからか「どうして」は自分を縛る鎖になっていた。

何という中二病^{しかぢゅつてく}。
それを。

「それが、楽しいんだよ。私は楽より、楽しい方が好きだ」

彼女は、見当外れであるかのように、全肯定してきた。

ふざけるな。そんな話があるか。

そんな疑問さえ持たなければ、人はそれ以外の、もっと建設的なことに意識を振り向けられると、他ならぬ先輩が言ったのではないか。

「無駄じゃないですか、それは」

「ああ、短期的に見れば大いなる無駄だ。それは否定しない。けれど、無駄だから人はそれをしてはいけないかというところ、そんなことはないよね。娯楽や芸術、恋愛の類。人が楽に生きようとするならば、幾らでも切り捨てるべきものはある。けれど、人は楽しいからという理由でそれをしてしまう。哲学だって、その一種というだけさ。せわしない現実の中で、頭脳をひとやすみさせるための、気分転換だと言ってもいい」

この先輩とは、こうやって俺が図書館に通うようになってから、ここ一月の間、軽く言葉を交わしてきただけだ。

だから、彼女が知っているはずがない。

俺が、自分の「どうして」を持って余していたことに、気付かれているはずもない。

だから、彼女はあくまで、自分の趣味を肯定するために、こんな話をしているに過ぎないのだ。

俺の悩みを、それでいいのだと。そんな風に肯定してくれているだなんて、そんなはずはありえない。

全部は、俺の勝手な思い込みだ。それは、わかっている。けれど。

「……楽しいから、ですか」

「ああ。君はどうだい、そういう娯楽は、嫌いかい？ 哲学ってヤツを、面白くないと思うかい？」

だめだった。卑怯だ。そんな顔で、そんなことを言われて、今更、無表情を貫けるはずもない。

単語を選び、こちらの勝手な感情の動きを殺して、最大限の譲歩の言葉を吐き出す。

「興味は、なくもないですね」

ただ、それだけの可愛げのない言葉に、先輩は、見ているこちらが恥ずかしくなるほどの笑顔を向けてきた。

この人は、何がそんなに嬉しいのだろう。

「君ならそう言ってくれればいいと思った」

「どうしてですか？」

「生き方が丁寧過ぎるからだよ」

それは、いつか自分が姉から言われた言葉だった。
奔放な姉と、理知的な先輩の姿が一瞬だけ重なって、消える。

「なんてね。これは私に哲学を教えてくれた先輩からの受け売りだ。
少し格好をつけ過ぎたかな」

まさか。

格好をつけてなどいない。

彼女は自然にあるべき言葉を口にして、それが一つの、紛れもなく尊い格好だと、そう思った。

「ところで、先輩はなんでそんな話を俺に？」

「さて、自明の理であることの意味と詳細を探るのが、哲学だよ」

俺の問いには答えず、先輩は席を立つ。

「なら、私は君にとっての命題になりたい。無論、君がそれを探ることが楽しいと思う限りにおいてしか、成立しない関係だけれどね。少なくとも、君は私にとって、楽ではないが楽しい命題を多く提供してくれる存在だ。まあ、嫌でなければ構わないが……」

哲学を娯楽と断じる、傲慢といえは傲慢な結論を出しながら。
彼女はどこか控えめな素振りで、言葉が続けた。

「また明日、ここで、よい哲学を」

それが、1敗目。

自分が彼女とのゲームを始めた、最初の日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2378o/>

ひとやすみ

2010年10月11日01時34分発行